

暮らしの中の発想

世界規模でさまざまな問題を抱え、手詰まり感のある現在の社会。ブレークスルーを起こすためには、これまでの習慣や常識にとらわれない、柔軟な発想が求められます。柔軟な発想力は、創造的な態度で日々の生活を送ることから生まれるものではないでしょうか。今回は、創造的な成果を上げている方々の暮らしぶりをご紹介しますとともに、私自身の「暮らしの中の発想」にも触れてみたいと思います。(三宮真智子)

私の発想法の源流

北陸先端科学技術大学院大学 副学長

國藤 進 (くにふじ すずむ)

Profile — 國藤 進

東京工業大学大学院修士課程修了後、富士通(株)国際情報社会科学研究所入所。北陸先端科学技術大学院大学教授・副学長、日本創造学会理事長・会長等を歴任。博士(工学)。専門は創造性支援グループウェア、知識創造方法論、合宿形式グループ知識創造教育。著書は『知識基盤社会のための人工知能入門』(コロナ社、共著)など。



母の教えから発明少年に

私の母親は教育熱心な人で、教育方針に関するこだわりがいくつもありました。その一つが「結果でなく、プロセスを褒める」ことです。こういう場合はこうやるんだよというプロセスを教わりましたが、結果がうまくいかなかったことで、母に叱られた記憶はありません。プロセスを褒められているうちに、多くの受賞を重ねました。もう一つが「不思議だなと思うことは大事に下さい。そこに何か潜んでいるよ」ということでした。最後に「分からなければ辞書を引きなさい。辞書を引いて分からなければ、そばにいる人にききなさい。分かるまで質問しなさい」ということでした(写真1)。



写真1 母と私

中学一年の理科の授業で「富士山頂ではお米がうまく炊けない」ことを習ったので、早速母の教えを守って、理科の先生を質問攻めにしました。富士山は3776mの日本最高峰で、大気圧が低く、水の沸点が低くなります。当時はいい圧力釜がなく、お米がうまく炊けないと、子供ながらに理解しました。私の祖父は大工、父はエンジニアだったので、中学一年時に科学クラブに入部し、先輩から多くの実験法を学びました。その中に蒸溜水を使う実験があり、たまたま蒸溜水の実験で、チョンボをして困ったなと思っていました。「困ったな!」という問題意識がある時、「不思議だな!」という現象に遭遇し、突然私のエンジニアの血が騒ぎました。そして「圧力を低くして蒸溜水を作れば、大量の蒸溜水ができるのでは?」というアイデアが浮かんだのです。このアイデアを科学クラブ顧問の大本峯生先生に投げたところ、「面白い、一緒にそのアイデアを検証しよう」ということになり、その結果、夏休みの科学作品として完成したのが「減圧蒸溜装

置」です。この作品は読売新聞の発明工夫展の全国展で優秀賞を獲得しました。そこで発明・発見にこだわった中学時代を送り、中学三年時にはトランジスタ回路を使い、お風呂の水量や温度を一定に保つ装置も試作しました。

多湖輝先生、宮城音弥先生との出会い

高校に入ると受験勉強に忙しく、発明に費やす時間がなくなりましたが、多湖輝先生の「頭の体操」を愛読し、パズルが好きになり(写真2)、そのお陰で数学が大好きになりました。数学の塾の新町先生は必ず「別解で解いてきた人は?」と問う別解指導の達人でした。当時は矢野健太郎氏の「チャート式数学」全盛時代だっ



写真2 パズルに熱中する私

たのに、新町先生に指導されたことは幸せでした。ちなみに、フィンランドの教育では別解追及は当たり前とのことです。

東京工業大学に入学したときのクラス担任は心理学の宮城音弥先生でした。宮城先生は翌年3月に退官されたので、彼の最後のクラスで一年間、総合講義というディベートの訓練を受けました。自分で課題を決め、書籍を調べまくって、課題解決のための仮説を報告すると、宮城先生がその仮説に対する反論をするという先端的講義でした。宮城先生から徹底的に論破されて悔しがった私たち学生が、リベンジとして今度は他の先生方に議論をふっかけて回りました。川喜田二郎、永井道雄、永井陽之助、穂山貞登、坂元昂、吉田夏彦、八杉龍一といった先生方が、快く引き受けて下さいました。いつもワイワイと議論に余念がない私たちは、ロボコンで有名な森政弘先生から「YYG（ワイワイガヤガヤ）チーム」と名づけられました。

心理研創造性研究班の創設

宮城先生の刺激で心理学研究会というクラブに入りました。ユニークなクラブで、顧問にマジック好きの多湖輝先生、先輩に世界三大パズルコレクターとなる芦ヶ原伸之さんがいました。私は創造性研究班を作り、発明や発見につながる創造性テストや心理テストの勉強をしました。後に多湖先生からは日本創造学会の会長職を引き継ぎ、芦ヶ原氏が集めた1万点余りのパズルNOBコレクションは最近、私がギャラリー長を務めるJAISTギャラリーに寄贈されました。不思議なご縁の連鎖が続いています。

KJ法との出会い

大学時代の最大の財産は川喜田

二郎先生が東工大教授職を辞して作った移動大学への参画です。1969年8～9月の二週間、日本中から108人の有志が集まり、黒姫高原で自炊のテント生活をしました。我々のユニット・リーダーは牧島信一氏で「現代人の失われた創造性を復活するには何をなすべきか」、KJ法を使って大激論をしました。牧島氏との縁で講談社から「問題解決学 KJ法ワークブック」の一部を執筆し、この本は23版までつづくベストセラーになりました。移動大学開催25回の人脈は我々の財産となっています。さらに2008年から我々は「ミニ移動大学」というフィールドワーク教育を実践しています。

常に創造的であるための信念と日常の工夫

このような経験を持つ私の、発想に関わる信念と日常の工夫を最後に紹介しておきます。

- ①思いついたことは絶対諦めずに成功するまで行う。するといつかは偶然の女神の微笑みを体験するだろう。
- ②何事もポジティブに考え、ポジティブに行動する。ただし、計画時にはありとあらゆる状況を想定した未来シナリオを作る。
- ③「ノコミュニケーション」を大切に。お酒の雰囲気はその人の本音を晒し出す。雰囲気を楽しむことが創造的な発想につながる。(写真3)
- ④ステーキホルダー全ての知(データ、情報、知識)を集める。360度の角度からの知を集めることで、全体像が見える。全体像を見すえ、時代の流れを俯瞰する中で判断する。
- ⑤ガーフィールドの「夢学」を白隠禅師の「夜船閑話」、「遠羅天釜」に書かれている内容とマージさせ、まとめたのが、次なる「國

藤流夢学発想法」である。

- ・寝る前に腹式呼吸しながら、必死で解決したい問題を考える。
- ・赤ワインをナイトキャップとして(写真4)十分に睡眠を取ると、明け方にその問題に対する夢を見る。
- ・問題を解決できない場合、最初は怖い夢を見る。
- ・毎日同じ努力を続けると、夢は変容していく。
- ・ある朝解決のヒントの夢を見る。
- ・枕元にメモ用紙を置き、その夢のメモを取る。同時に、メモの内容を誰かに話す。
- ・すると、いつかはその内容を実現できる。

このように、日々の暮らしに根付いた「國藤流夢学発想法」は夢の実現をもたらしてくれるのです。



写真3 ノコミュニケーション



写真4 ナイトキャップ